

研究主題	生徒がより学びを深めるための授業改善方法を探る		
副題	～学びの「視覚化」「言語化」を伴う対話的活動の導入～		
学校名	愛知県立天白高等学校	校長氏名	福應 浩

1 はじめに

本校は令和4年度より2年間「あいちラーニング推進事業」の研究主管校に指定され、「ICTを活用した『主体的・対話的で深い学び』を推進するための取組」というテーマで研究を続けてきた。各方面からのご理解とご協力、ご指導ご鞭撻を賜り、ある程度は研究が形になったのではないかと自負している。

一方で研究に際限はなく、せっかく形になった本校の研究を継続させた方がよいのではという機運が校内にあったのも事実である。そのため今年度は上記主題と副題のもと、引き続き校内で研究を進めていくことにした。

2 研究重点項目

過去2年間の研究ではICTの活用を唱えていたが、今年度はICT利用に限らず「授業改善」に重点を置くことにして、以下の4つの研究重点項目を設定した。

- | |
|--|
| <p>(1)効果的な問いや課題で学びの機会を創出するように授業改善に取り組む</p> <p>(2)「個」の考えや「きづき」をより深めさせるために、学びの「視覚化」「言語化」「構造化」を伴う対話的活動を導入して、授業改善に取り組む</p> <p>(3)外部より招聘する指導助言者や職員間のアドバイスを積極的に取り入れ、より専門的、多角的に授業改善を進める</p> <p>(4)全職員が情報収集・発信を意識しながら多面的に授業改善に取り組む</p> |
|--|

3 具体的な取組

まず年度当初に各教科の代表者からなる「授業改善プロジェクトチーム」を立ち上げた。このチームが一年間の研究計画・立案・実施を行う機関となった。そこではじめに二つの研究基本方針を確認した。一つ目は過去2年間の研究成果をそのまま活用することである。二つ目は、今年度の研究においても上記重点項目に則って各自で研究を進めることである。これは教育公務員特例法第21条にある、教員は「絶えず研究と修養に努めなければならない」とあることに基づいている。授業発表者のみならず、だれもが授業改善を目指すこと、教科の特性であったり、個人のスタイルであったりは維持しつつ、多角的な研究プロセスのベクトルを、「授業改善プロジェクトチーム」がある程度共通方向に導くという方針を確認することが重要であった。

基本方針を確認した後は、学校全体としてどのように研究を進めるかを話し合った。その結果

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・外部専門家を招聘して授業を参観してもらい指導助言を賜る ・外部専門家を招聘して講演会を行い、最新の教授法にふれ、授業改善方法を学ぶ ・外部専門家の指導・助言を各人がどのように活かしているかを共有して、各教科で中間報告をまとめる ・それぞれの授業改善方法、授業の工夫、研究成果を相互に学び合う授業参観週間を設定する |
|--|

の4つを柱に一年間研究することにした。

(1) 授業検討会(全2回)

教科を問わず、外部専門家による授業参観と研究協議を経ることにより、それぞれの授業の改善点の確認はもちろんのこと、推奨される教授法の伝達等を目的として、2回にわたり授業検討会を実施することにした。今年度は指導助言者として、名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授の坂本将暢先生をお迎えした。参観を希望した教員の授業を坂本先生に観ていただき、教育実践研究や協働型授業研究をされている視点からご指導ご助言を賜り、それを授業者が所属する教科に還元するというねらいで行った。

時間的な制約がある中で、7人が坂本先生の参観を受け、その後研究協議を行った(他の授業でどうしても研究協議に参加できない場合は、個別に坂本先生とやりとりをしてふりかえりを完遂した)。

授業発表に際しては、負担を最低限に抑えるために下記のような極簡易指導案を任意で作成することにした。

極簡易指導案 時 限 () 科目名 () 授業者 () クラス () ご高評

1 単元名
2 単元の目標
3 本時の目標
4 指導観(今までどのように授業を進めてきたか、また改善しようとしてきたか)
5 3を達成するための工夫や学びを深めるための仕掛け
6 5で期待する効果
7 本時またはこの単元では、本年度研究重点項目のどの部分にねらいを定めているか



多嶋教諭 数学Ⅱ



小久保教諭 物理



織瀬教諭 現代の国語



内藤教諭 数学C



服部教諭 英語コミュニケーションⅡ



壺東教諭 歴史総合



薫森教諭 英語コミュニケーションⅠ

(2) 指導助言者講演会

2回にわたる授業検討会で、坂本先生が参観された7つの授業の感想、共通する長所と改善点を端的にお話していただいた。また、先生が普段から研究されている教育実践研究や協働型授業の研究の観点からも適切な指導助言をいただいた。多用の中40名あまりの職員が参加した。以下にその要旨をまとめた。

ア 授業者に共通する長所

- (ア) 教え込み過ぎない授業の構成・・・生徒も一緒に作る授業、主体的な対話の進展と適度なICTの活用
- (イ) 授業者が大切にしたいことの反復的発言・・・授業目標や教師の願い・ねらいなど
- (ウ) 「研究重点項目」の存在・・・「何を」「どのように」「どこまで深く学ぶのか」を生徒教員ともに理解した上で授業を行う

イ 課題

- (ア) 学びの系統性・・・「今までや今日の学び・明日以降の学び」と教師の願いの結び付きが明確でない
- (イ) 効果的な問いの不明瞭さ・・・「解ける/解けない」が「深い学び」に引き継がれていない
- (ウ) 個別最適化というよりは協働的な学び・・・生徒に応える教師のフォローがないと共倒れになる恐れあり

ウ 提言

- (ア) (極簡易)指導案に教師の願いを記入する・・・「教師の願い」と「生徒の実態」のズレが明瞭になる
- (イ) 机間観察・指導・・・目的のある周り方をして生徒の主体的な進展を促す
- (ウ) 「理解する」の分解・・・解釈・例示・分類・要約・推論・予測・比較・説明などが理解の手段として存在

エ ふりかえり

講演の後、参加者によるふりかえりをGoogle Formsで行った。そこで出た質問等に坂本先生にメールで回答していただき、それを職員全体で共有した(Google Classroom利用)。この講演会は回答者の93%が「今

後の授業改善に役立てられる」「今後の授業改善にまあまあ役立てられる」と回答する、非常に満足度の高いものとなった。

(3)各教科中間報告

2で挙げた研究重点項目と指導助言者による講演会を通して、それぞれが研究している授業改善方法を教科ごとに共有して、各人がより深く授業改善につなげられるような機会を設けた。年度途中でふりかえりを共有することは、本校が学校全体で「深い学び」を研究しはじめてから初の試みである。ここにその一部を紹介したい。

国語科・・・生徒の言語活動の充実とそれに伴う思考力・判断力・表現力を伸ばす授業の研究に取り組んできた。グループワークの充実、ICTを活用した生徒間の意見交換や相互評価の取組、複数教材の読み比べ、「書くこと」に重点を置いた指導等を行っている。(林教諭)

地歴公民科・・・対話的活動ではICTを活用したグループワークを通し、教科担当者が個別に設定した課題の探究に取り組んでいる。また、さかのぼり授業や仮想体験授業を取り入れた授業も実施している。科目横断的な活動にいかに関わり込むかが課題である。(鶴飼教諭)

数学科・・・毎授業の開始時に相互解説を実施し生徒の学習改善と教員の指導改善の機会としている。

毎定期考査ごとに解法マップを作成し別解創出や誤答分析の一助としている。

スタディサプリの動画を利用して、反転授業に取り組んでいる。(鈴木教諭)

理科・・・豚の眼の解剖 問：眼の中は何色？強度は？(右写真2枚参照)

哺乳類の豚の眼はヒトの眼とほぼ同じである。眼の中を見る機会はめったにない。

実際にさわること、眼のつくりをより知ることができた。

生徒同士で画像が共有できるように、グーグルスライドを使った。(野村教諭)

英語科・・・会話的ではなく対話的な活動を取り入れている教員が多い(対話の対象は生徒同士、教員と生徒、生徒と教材等様々である)。また、それらの取組や手法が学びの「構造化」につながるにはどうすればよいかを模索している教員もいる。(薫森教諭)

保健体育科・・・保健では、パワーポイントや資料動画等を活用しながら学びの「視覚化」を図っている。

体育では、動画撮影を取り入れ客観的に自分の姿が捉えられるようにしている。個だけでなく、グループワークを行うことでより多くの「きづき」から知識が深まるよう工夫している。(辻教諭)

情報科・・・知識と日常の事象を結びつけるような問いかけをすることで、単なる知識の伝達だけではなく、情報Iで学ぶ知識が日常の様々な場面で活用されていることを意識させた。プログラミングやデータの活用といった実習を多く含む内容を、生徒が課題解決するような授業展開で実践した。(多嶋教諭)



(4)授業参観週間

研究も3年目に入り、今年度はICTの活用をテーマから外したことにより、より多くの先生方が授業改善に積極的に取り組むようになった。それぞれの授業改善方法、授業の工夫、研究成果を相互に学び合うため、今年度はじめて教員同士による授業参観週間を設定した。期間は11月11日から15日迄の1週間で、以下の3つのルールを設定した。

・原則教科内での参観 ・双方合意の上で参観(できるだけ前日までに) ・途中入退室も可

この1週間では予定が立たず、翌週に相互了解のもと授業参観をする姿も見られた。何よりも特筆すべきは、ただ互いに参観するだけでなく、授業後に研究協議をしていたことである。授業の狙い、発問の意図、ICTの活用方法はもちろんのこと、「教師の願い」や生徒の「きづき」、学びの「視覚化」「言語化」「構造化」、教科横断に至るまで、あらゆる話題に関して熱い議論がされていた。授業を参観した教員は延べ60人を上回った。これはいかに本校の先生方が、どのように授業を改善したらよいかに関心が高く、それを日頃から探究し続けている表れであり、今年度の学校としての研究の取組が形になっていること表れであると感じた。

(5) その他(学校教育助成事業の活用)**ア 先進校視察**

本事業の助成により、3名が異なる府県の先進的取組を行っている高校の視察に臨んだ。校務における様々な手がかりを求め、各々授業改善とは別に以下のようなテーマを持って視察した。視察報告は授業改善プロジェクトチーム内で口頭や書面により行った。特に有益な情報に関してはそれぞれが所属する教科や分掌に持ち帰って共有した。また、報告を誰もが閲覧できるように校内ネットワーク内に保存した。

- | | | | |
|-----------|-------------|------|--------------------------|
| ・ 11月 7日 | 京都府立桃山高等学校 | 薫森教諭 | 総合的な探究の時間・ICTを活用した授業について |
| ・ 11月 8日 | 滋賀県立彦根東高等学校 | 鈴木教諭 | 新学習指導要領・評価(成績処理を含む)について |
| ・ 11月 21日 | 静岡県立浜松南高等学校 | 多嶋教諭 | 遠隔授業・キャリア教育などについて |

イ ホワイトボードの活用

購入したホワイトボードは、なかなか理解が深まらない生徒に対して、「個」の考えや「きづき」をより深めさせるために利用する。ホワイトボードでより見やすく、よりわかりやすく分類・例示・解説することで、生徒の学びが「視覚化」「言語化」「構造化」されるのに役立てることができる。さらに、少人数での対話的活動を付加することで学びが深まり、「個別最適化」に役立てることが大いに期待されている。

4 成果と課題**(1) 成果**

研究も3年目に入り、かなり多くの先生方が当たり前のように授業改善方法を模索していることこそが成果である。そして、学びの主体が生徒に移行し、「教える」ことよりも「気づかせる」「学ばせる」ことに重点を置く授業が増えてきている(※3(2)ア参照)こともまた大きな成果であり、主題の答えであるとも考える。教科の特性や手法の違いなどから、教員が協働して研究することが難しいと言われる中で、研究重点項目に則つてある程度同じ方向性で研究を進め、それを互いに共有し、形に残していることが大変素晴らしいと感じる。

その重点項目に関しても、名古屋経済大学教授の大谷尚教授、岐阜女子大学の久世均教授、名古屋大学大学院の坂本将暢准教授の指導助言を経て、毎年成果を確認しながらブラッシュアップしている。今年度の指導助言者である坂本先生からも、「この研究重点項目があるからこそ研究の方向性が明確で素晴らしい。研究内容の答えも、この中にある気がする。」と賞賛の言葉をいただいている。

(2) 課題

一つは「生徒がより学びを深めるための授業改善方法」に際限がなく、明確な提言ができていないことである。上述した「学びの主体が生徒に移行し、「教える」ことよりも「気づかせる」「学ばせる」ことに重点を置く授業が増えてきている(※3(2)ア参照)」は、学びの「視覚化」「言語化」による効果の最たる例ではあるが、それ以上のものを明確に提言できるにはまだ至っていない。今後さらに探究していきたい課題である。

もう一つは(1)に相反するが、研究に対してどうしても受動的になってしまう部分があることである。研究や探究はどなたかにお任せしたいという雰囲気は根強い。情報が欲しい、教授法を教えてほしいという声は上がるが、自ら能動的に探究する先生方は限られる。来年度以降の研究に積極的でないことが課題である。

5 おわりに

ご多忙の中指導助言者を引き受けていただいた名古屋大学大学院の坂本将暢准教授をはじめ、非常に多くの方々のご協力によって本年度の本校の研究が成り立っていることにまず感謝申し上げたい。研究3年目となった今年度が今までで一番多くの先生方の研究機運が高まり、上述したような成果が生まれたと自負している。

一方で上述した課題が残っているのも事実である。これらの課題解決方法を個人で探究することはもちろん重要であるが、学校全体として研究機運を高めていくことの重要性を強く感じる。予算が限られ、なかなか同規模での研究は困難かもしれないが、まずは研究重点項目や授業参観週間など、やれることから着実に実行して、その研究成果を生徒に還元できる方法を模索していくことを再確認して、この報告を終えたい。